



百均とマ
マチヤリ

川崎ゆきお

町で羽振りのよかった高木だが、今は寄る年波で、現役から退いている。いい時期に引いたというより、仕事がなくなったので、やめたのだ。

高木がママチャリで町内を走っていると、石田と言う同業者を見た。声をかけようかどうかと迷っているうちに、消えてしまった。車が横切ったので、一瞬見えなくなり、そのあと前方をよく見たのだが、いない。

枝道に入ったのではないかと思い、次の交差点まで急いで走った。

すると狭い路地をゆくスーツ姿の石田がいた。この路地は古くからあり、旧家がまだ残っている。

大きな倉があり、その建物の玄関が路地に面している。そこへ石田が入っていった。

高木もよく知っている場所で、その家は質屋だ。サラ金へ行くのなら分かるが、質屋に何の用があるのだろうか和高木は興味を抱いた。

石田が入ったあと、高木も続いて入った。

「ああ、高木さんじゃありませんか。久しぶりですねえ」石田が先に声をかける。

小窓から、質屋の主人も高木に会釈する。高木は何かの寄り合いで何度か合ったことがある。仕事的には繋がりはないが、主人とは面識はあるのだ。

それは高木がこの町の顔役だったためだ。

「まだ、質屋などやっているのですかな」

「ああ、まだねえ」

質屋が表看板なのは高木は知っている。本職は裏でやっている。

同業者の石田が質屋に来たのは質草を持って、ではない。裏の話があるのだろう。

「悪いところを見られてしまった」と石田が白状する。

「何か面白い話でも」

「ちよいと出物がありましてねえ」質屋の主が話を引き受ける。

「ああ、そうなんですか。それじゃ、私はおじゃまだ」

石田と質屋は互いの顔を見る。

「いや、ここで失礼するよ。石田君を見たので、つい声をかけたかっただけだから」

「まあ、そう言わず、高木さんもどうです」

「何が」

「いやいや」

「妙なことを企んでいるのでしょうかねえ」

「まあ、そういうことです。ここは高木さんにも加わってもらえれば、大助かりなんですがね」質屋が作り笑いで、そう頼む。

石田は「うんうん」とばかり何度も頷いている。

「いやあ、私はもう引いた身ですからなあ」

「面白い話があるんですがねえ」

「石田君も、困ったことがあっても、ここには来ない方がよろしいですぞ」

質屋がむっとする。分かりやすい顔だ。

高木はそれだけ言うと、表に出て、ママチャリに乗り、百均へ向かった。

高木は彼らが何を企んでいるのかは知らないが、おおよそ察しは付く。

昔の高木なら、すぐにその企てに加わっただろうが、今は面倒に思えるだけだ。

羽振りがよかったのは一瞬で、その先の将来が今ある。ママチャリで百均へ行く暮らしが。

了